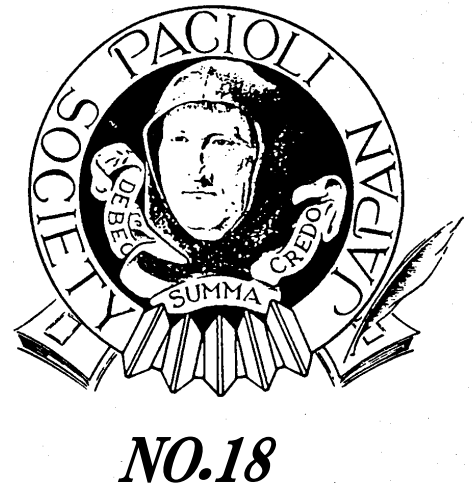


A A A

ccounting,
rithmetic &
rt Journal



The **IP**ACIOLI **S**OOCIETY **U**JAPAN

2004.0

2

第 10 回会計史家国際会議開催について

来る 2004 年 8 月 1 日から 5 日にかけてミズーリ州セントルイスとミシシッピ州オックスフォードにて The 10th World Congress of Accounting Historians が開催されます。St.Lois は Lamdert 国際空港から半マイルのところにある Renaissance St.Louis Hotel-Airport にて、また Oxford は The University of Mississippi campus の東端にある Triplett Alumni center Hotel を会場にしています。

国際会議のプログラムは次の通り

Saturday, July 31 Early Bird Reception, Renaissance Hotel

Sunday, August 1 Opening Reception, The Mercantile Library—St. Louis, Missouri

Monday, August 2 Opening Session

Concurrent presentation A~D

Tuesday, August 3 Plenary 1 Concurrent presentation E, F

Trip from St. Louis to Oxford

Reception in Oxford, Mississippi

Wednesday, August 4 Opening Session

Concurrent presentation C~J

Closing Dinner

Thursday, August 6 Plenary 2

Concurrent presentation K, L

Closing Lunch dedicated to S. Paul Garner

会議の登録料は 5 月末までの場合 \$295(それ以降は \$360)を Mrs.Kathy Rice 宛に支払うことになっています。

10th World Congress of Accounting Historians

The University of Alabama

BOX 870220 Tuscaloosa, AL35487, USA

Fax:(205)348-8153 e-mail: kricesloeco510@comcast.net

国際会議の議長であるリチャード・ヴァンガーマーシュ教授の招待状によると、故 Antonie van Seventer の遺族がミシシッピ大学に寄贈した van seventer の著作在庫

を同大学教授であり、かつ会議の共同議長である Dale Fleisher が参加者に配付するそうです。大変いいアイデアと思われる。

Accounting Bibliography by Walter Hausdorfer

The History of Accountancy by O.ten Have

Contemporary Accounting by George J.Costouros and A.va Seventer

なお、本年度のAAAの学会は8月8日（日）から11日（水）にかけてフロリダ州 Orlando で開催されるので、二つの学会をまたぐツアーが可能です。



第3回会計史国際会議に参加して

片岡泰彦(大東文化大学)

第3回会計史国際会議(The third Accounting History International conference)は、2003年9月17日から19日までの3日間、イタリアの都市シエナ(Siena)のサンタ・キアラ・グラジエート・カレッジ(Graduate College Santa Chiara)で開催された。

このシエナでの国際会議は、来年の2004年8月1日から5日までアメリカのセントルイス(ミズーリー州)とオックスフォード(ミシシッピ州)で開催される第10回会計史世界大会(10th Word Congress of Accounting Historians)とは全く別個の組織体である。来年アメリカで開かれるこの世界会議の方は、第1回目のブルッセル(1970年)に始まり、第2回目のアトランタ(1976年)、第3回目のロンドン(1980年)第4回目のピサ(1984年)、第5回目のシドニー(1988年)、第6回目の京都(1992年)、パチョーリの「スムマ」出版500年記念特別会議のヴェネツィア(1994年)、第7回目のキングストン(1996年)、第8回目のマドリード(2000年)、第9回のメルボルン(2002年)と続いてきた、歴史も古く伝統的な世界大会である。この大会には私も何回か出席し、報告をしたこともあるので、ある程度は会議の内容もわかっていたつもりである。しかし、今回の国際会議の方は、会計史の会議とは言いながらも、会議の性格はわからず、初めて参加となった。今回のシエナでの国際会議の第1回目は、1999年にメルボルンで、第2回目は2001年に大阪で開催されている。そして大会の会長は、オーストラリアのDeakin大学のガーリー・カーネギー(Gary D.Carnegie)教授である。そして主催者代表は、シエナ大学のアンジェロ・リカボーニ(Angelo Riccaboni)教授である。会計史に関する別個の国際会議が、世界に二つ存在するのも多少おかしい気がしたが、2人の教授とは知り合いだし、とにかく出席してみることにした。

シエナの起源は、ローマの建国にまで遡るが、歴史にその名を現すのは、12世紀から13世紀にかけてである。フランスとイタリア中部を結ぶ交通路の都市として発展を遂げ、中世における商業、金融業、手工業を中心とする経済上の活躍で名声を馳せるのである。ただし全盛の時代は、強敵フィレンツェに勝利した1260年のモンタベルティの戦いから11世紀中頃までで、14世紀末からヴァイスコンティ家やペトルッチ家に支配され、1559年にはメディチ家を君主とするトスカーナ大公国に併合され、1860年には新生イタリア大国に統合されるのである。しかし現在でも、シエナは、中世の面影を十分に残す美しい町である。世界的に有名なカンポ広場を中心に、ロマネスク＝ゴシック建築の傑作であるドウオモ、シエナの歴史を刻み込んだプブリコ宮殿等が立ち並ぶ。そして、一歩広場から横道に入ると石畳の細かい道が迷路のように入り組んで続いている。そこを歩いて行くと中世にタイムスリップした錯覚を覚える。会場のサンタ・キアラ・グラジエートカレッジは、町の南西部にあるサン・マリア・パジリカ(＝公会堂)の隣の小さな学校で、入り口も近く、場所に詳しい運転手のタクシーで行ったのでわかったが、歩いていってはどうも見付かりそうもないひっそりとした建物だった。しかし、建物の内はかなり広く、糸杉が並ぶ奥の庭からは、シエナの美しい町並みを見渡すことができた。

会議の1日目(17日)は、登録とオープニング・レセプションのみであった。18日は朝の9時から夜の7時まで、19日は朝の9時から夕方4時まで報告が行われた。また18日の夜は、SocialDinner(夜食会)が、チベッタ通り(Contrada della Civetta)で開かれた。ソーシャル・デ

イナーというので、どこかのレストランでやるのかと思っていたら、全く予相に反して建物と建物の間の広場を幕で仕切って、広いコーナーを作り、そこに机と椅子を並べて食事をするのだった。しかし出てきたトスカート料理は、非常においしく満足できた。

報告は、2つの会場で、約50人の報告者が行った。50人の報告の内容は、17世紀の会計史を対象としたものが5人で、他は全て19世紀から20世紀を対象としたものであった。21世紀を対象とした報告もいくつかあった。会計史研究の傾向も大きく変わったということと、はたしてこれが歴史なのかというものもあった。日本人では、野口昌良氏と松本祥尚氏が報告を行った。会場では、多くの外国の教授と久しぶりに会うことができた。パロマ大学のジュセッペ・ガラッツイ教授とは、ピサ、シドニー、京都、タオルミーナ（メッシナ大学創立450年記念会計史国際会議）の各大会で親しくなった間柄である。パチョーリ簿記論の現代イタリア語の翻訳行者カルロ・アンテイナー教授とは、5年前のクオルミーナでの会議以来である。同じくパチョーリ簿記論のスペイン語の翻訳者、フェルナンド・エステベ氏とは、京都、キングストン、タオルミーナ以来の再会である。会長のガーリー・カーネギー（Gary D.Carnegie）教授とは、京都、タオルミーナ以来の友人であり、主催校代表のシエナのアンジェロ・リカボニ（Angelo Riccaboni）教授とはタオルミーナでの会議以来である。

主催場所がイタリアのせい、出席者のほとんどがイタリア人で、他はオーストラリア人、ポルトガル人、英国人、スペイン人そして日本人等であった。私の知る限り、アメリカ人の出席はゼロであった。帰国後、アメリカのヴァンガーマーシュ（Vangermerch）教授から、第10回会計史世界会議を、来年の8月1日から5日間にわたって、セン・トルイスとオックスフォードで開催する旨のパンフレットが送られてきた。このことが関係しているかどうかはわからない。

会場の参加者には、世界会議ともダブっている人がたくさんあり、世界に会計史研究に関する学会が2つあることについて、誰も疑問に思っていないようであった。伝統的な世界会議の方は会員も参加者も多く、持ち廻りでその都度主催国が大会の全権と全責任を持つのに対し、今回の国際会議の方は、規模も小さく、オーストラリアのカーネギー教授が責任を持って運営を進めているように思えた。2001年には、大阪で会計史国際会議が開催されたようであるが、そのことを筆者が何も知らなかったということは不思議な感じがした。

なお第4回会計史国際会議は、2005年の9月7日から9日まで、ポルトガルのプラガで開かれることが決定している。我々は、組織がどうであろうとも、会計及び会計史に興味を有する者として、機会のある時は、積極的に国際的な学会に参加し、他の研究者たちと交流を深めることは、有意義なことであろう。

会計史国際会

回数	年度	都市名	国名
1	1999	メルボルン	オーストラリア
2	2001	大阪	日本
3	2003	シエナ	イタリア
4	2005	ブラガ	ポルトガル

会計史世界会議

回数	年度	都市名	国名
1	1970	ブリュッセル	ベルギー
2	1976	アトランタ	アメリカ
3	1980	ロンドン	イギリス
4	1984	ピサ	イタリア
5	1988	シドニー	オーストラリア
6	1992	京都	日本
特別	1994	ヴェネツィア	イタリア
7	1996	キングストン	カナダ

8	2000	マドリッド	スペイン
9	2002	メルボルン	オーストラリア
10	2004	セントルイス オックスフォード	アメリカ



書評「中世後期イタリアの商業と都市」齊藤寛海著

片岡泰彦(大東文化大学)

著者(齊藤寛海教授)は、長い間、イタリア都市史の研究に専念され多くの論文や翻訳によって、多大な示唆を我々に与え続けてきた。しかし残念ながら、まとまった著書にはなっていなかった。そして、ついに著者は、430頁以上に及ぶ研究書を、一つの金字塔として完成させたのである。全体は、第1部フィレンツェの毛織物工業、第2部イタリアの商人と地中海商業、第3部イタリア都市の権力構造の3部から構成される。

第1部は、フィレンツェの代表的な商品である毛織物の持つ役割とその意義を考察する。特にフィレンツェの有力な毛織物業者であるリヌッチの1322年9月1日から1325年8月までの元帳の分析は、会計史上でも興味深い。リヌッチ家は、フィレンツェの有力な家族であり毛織物工業の織元であった。当時のフィレンツェは、1年が3月25日(キリストの受肉日)に始まり、翌年3月25日に終わる。会計帳簿は、元帳のみである。もちろん関連する帳簿が存在したであろうことは想像できるが、その存在が不明なので分析されていない。しかし、著者の会計帳簿への分析は誠に緻密に鋭く遂行されている。

元帳は、借方と貸方に区分され、左右貸借対照形式の複式記入である。

勘定には人名勘定と商品勘定が見られる。損益勘定と資本勘定の存在については不明である。

著者は、会計史的観点からではなく、経済史的観点から分析を遂行しているので、複式簿記構造をこの帳簿が有するかどうかは明らかではない。しかし、この元帳は、フィレンツェのレニエリ・フィニ(1296年～1305年)の元帳と類似する形式を持ち、会計史上貴重な元帳といえる。付論にあるヴェネツィア貨幣体系は、ヴェネツィアのデナロ銀貨、グロッツ銀貨、ドゥカート金貨等を中心に、ヴェネツィアの貨幣制度について、詳細な解説がなされており、経済史上のみならず会計史上きわめて有益な研究である。

第2部では、ヴェネツィアの商人を中心とするイタリア商人等が形成した地中海商業の発展とその構造を解明する。地中海商業の規模の拡大、輸送の形態とその発展過程、遍歴商業から定着商業への移行、地中海商業における丸型帆船とガレー船の比較研究、ヴェネツィアの競争者たるジェノヴァ、バルセローナの海上での商業活動。さらには地中海商業における市湯と商品、定着商業における商業通信の重要性、そしてフィレンツェ、ヴェネツィアにおけるユダヤ人の商業活動についても詳細に解説する。

第3部では、都市国家から領域国家への移行、共和制から君主制への移行、都市貴族、平民、支配者等の関係について詳述する。特に中世イタリアを代表する2の都市国家・ヴェネツィアとフィレンツェの国家構造の比較研究は興味深い。商業が発展した結果13世紀から14世紀にかけて、商人たちが権力を持ち始め、都市の権力構造は大きな変革を遂げた。しかし、ヴェネツィアとフィレンツェでは、その権力構造の内容に大きな相違があった。ヴェネツィアにおける国家的権力闘争は、直族内部の党派的なもので、貴族と庶民間のものではなかった。庶民の上層部は、貴族に吸収・同化され、貴族の支配体制は安定していた。これに対し、フィレンツェでは、庶民が固有の団体や組合を持ち、権力基盤として貴族に対抗した。そして庶民の基盤は、地区団体から軍事的機能を持つアルテへと移行した。7大アルテの組合員は、貴族にも対抗し得る一大権力を有するに至るのである。

著者は、かつてイタリア史研究の権威者であった故星野秀利教授と故清水屢廣一郎教授から教養を享受し、大きな影響を受けている。そして、著者の研究は、2人の研究を十分解釈し、分析して

自分のものとし、2人の研究をさらに発展させて行くという仕事を遂行し、成功させたのである。

この著書を読みこなすことは、必ずしも容易ではない。

それはわかりやすい文章にもかかわらず、内容の豊富さと基礎的知識の必要性によるものと思われる。学界への貢献も極めて大きい。さらに研究者のみならず、イタリア史に興味をもつ人々にもぜひ一読を薦めたい秀作である。

The **IP**AGIOLI **S**OCIETY **U**APAN

日本パチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783
The Institute for Management and Accounting / Takushoku Univ. Miyokawa Office